

事業所名 児童発達支援・放課後等デイサービス事業所 あのにむ 支援プログラム 作成日 2026年 1月 5日

事業所理念	誰もが安心して、ありのままの自分を、のびのびと表現できる世界をつくる					
支援方針	<p>1. 一人ひとりの「そのらしさ」を尊重し、ありのままの自分を肯定できる心を育みます。 事業所名「あのにむ」は「anonym=名もなき人」に由来します。個々の背景や障害名、特性といった表層的な情報にとらわれず、その子の本質的な価値と向き合い、かけがえのない一人の人間として尊重します。</p> <p>2. 音楽を通じた多彩な表現活動により、心と体の健やかな成長を促します。 音楽の持つ力を最大限に活用し、子どもたちが自発的に「楽しい」と感じられる成功体験を積み重ねることで、一人ひとりの可能性を伸ばし、非認知能力（創造性、協調性、自己表現力など）を育みます。</p> <p>3. 子どもの興味関心を起点とした、オーダーメイドの支援を提供します。 一人ひとりの発達段階や興味の対象を丁寧にアセスメントし、個別支援計画を作成します。個別支援を基本としながら、必要に応じて小集団での活動を取り入れ、それぞれの可能性を最大限に引き出します。</p>					
営業時間	9時	30分	18時	30分	送迎実施の有無	あり なし
支援内容（放課後等デイサービス）						
健康・生活	<p>【心と体の土台を音楽で育む】 生活リズムや心身の安定は、すべての活動の基礎となります。音楽の持つ生理的・心理的効果を最大限に活用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・始まりと終わりの歌（ルーティンの確立）：「始まりの歌」でセッションを開始し、「終わりの歌」で締めくくります。歌の中で挨拶を交わすことで、子どもは場の設定を認識し見通しを持つことができ、心の準備が整います。安心感が生まれ、生活リズムの形成に繋がります。 ・呼吸と発声のトレーニング：弾むような歌やなめらかに声を出す歌など様々な音型の歌を取り入れ、腹式呼吸で歌うことで、自律神経を整えリラクゼーションを促します。気持ちを落ち着かせるスキルとして、日常生活でのセルフコントロールにも繋がります。 ・「気持ち」に合わせた音楽活動：絵本やミュージカルの主人公の気持ちになってセッションを楽しみます。嬉しい、安心、おだやか、悲しい、不安、怒っているなどの気持ちや感情のありかたを音楽で表現する体験を取り入れます。自分の感情状態を客観的に捉えてコントロールすることは、心の健康維持に不可欠です。 ・「気持ち」と音楽の融合：お気に入りの旋律やリズム、音色などを見つけ、自分の気持ちと結びつけることで、感情の世界を広げていきます。「落ち着く」「元気になる」「優しい気持ちになる」など、自分の感情を見つめてコントロールするスキル（セルフマネジメント能力）を育みます。 ・姿勢を意識した楽器演奏：ピアノ、キーボード、木琴などを演奏する際に、「良い姿勢で座る」ことを意識づけます。体幹を使い、正しい姿勢を保つ習慣は、日常生活のあらゆる場面で役立ちます。 					
	運動・感覚	<p>【音楽で身体を動かし、世界を感じる】 多様な楽器や音楽活動は、粗大運動・微細運動、そして感覚統合を促す機会の宝庫です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボディパーカッション（身体認識と協調運動）：手拍子、足踏み、膝を叩くなど、自分の体を使ってリズムを奏でます。ボディイメージ（自分の体の地図）を育て、左右の協調性やリズム感を養います。 ・楽器を使った粗大・微細運動：大きな太鼓を立てて叩いたり、ダンスやリトミックで音楽に合わせて全身を動かします（粗大運動）。ピアノの鍵盤を一本指で押す、ギターを弾く、木琴をマレットで叩く、シェイカーを適切な力で振るなど、指先の巧緻性や力のコントロールを高めます（微細運動）。 ・感覚統合の促進：聴覚へのアプローチとして、様々な楽器の音色、音の高低・大小を聞き分けます。特定の音に過敏な子には、音量を調整したり、優しい音色の楽器（カリンバ、レインスティックなど）から始めたりと、子どもに合わせた最適なアプローチを行います。また、触覚・固有覚へのアプローチとして、楽器の振動（大きな太鼓など）を体で直接感じます。重い楽器を「よいしょ」と運ぶ体験も、固有覚への良い刺激となります。様々な材質の楽器に触れることも重要です。 ・音の絵画「サウンド・ペインティング」：情景や物語が豊かな楽曲（例：「ピーターと狼」「動物の謝肉祭」）を聞き、そこから感じたイメージを絵で自由に表現します。速い・遅い、高い・低い、鋭い・柔らかいといった音の感覚を、素材や道具を様々なものから選び、色や形、線のタッチで表現することで、聴覚情報を視覚情報に変換する感覚統合と、抽象的な表現力を養います。 ・本物楽器にチャレンジ：探求心旺盛な子どもには、指導者の付き添いのもと、スタインウェイのグランドピアノや、サイズの合った弦楽器などに触れる機会を設けます。指でそっと鍵盤に触れてみる、弦を優しく弾いてみるなど、本物の楽器が持つ響きや振動を体で直接感じる体験は、音楽への興味をさらに引き出します。 				

本人支援	認知・行動	<p>【音楽のルールで「わかる」を増やす】</p> <p>音楽は、聴覚だけではなく、様々な感覚を使って、一人ひとりの認知特性に合わせて楽しめるものです。また音楽には、楽譜、リズム、構成など、認知能力を高めるための構造的な要素が豊富に含まれています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽譜・シンボルを使った演奏（記号と意味の理解）：視覚優位型の子どもの場合は、簡単な図形や色を使った「絵楽譜」から始め、音符や記号へとステップアップします。記号を見て、それが特定の音やアクションに対応することを理解するプロセスは、文字学習や標識の理解にも繋がります。 ・リズム模倣と創作（短期記憶とパターン認識）：指導者が叩いたリズムを真似する「リズム模倣」は、音声模倣と動作模倣の双方を促します。模倣する力は、周囲の人の日常動作を真似る力につながり、自立を促します。また、短期記憶（ワーキングメモリ）も鍛えられます。慣れてきたら、自分でオリジナルのリズムや歌を作るなど、創造的な活動も取り入れます。これは「2拍子は、リンゴ、リンゴ…のパターンだね」というように、数の概念形成にも繋がります。 ・「原因と結果」の学習：「太鼓を叩けば、音が出る」「鍵盤を強く押せば、大きな音が出る」という体験は、行動とその結果を理解する基本的な認知プロセスを育みます。 ・絵合わせフラッシュカード：生物、国旗、地図、人物、宇宙などの絵カードを用意します。ものの名前と短い解説とともに絵カードをリズムよく提示し、見て理解すること（視覚）と聞いて理解すること（聴覚）を結びつけ、詳しく知りたいという好奇心を刺激し興味関心を広げます。 ・楽曲の構造理解（課題解決能力）：「Aメロがあって、Bメロがあって、サビが来る」といった曲の構成を理解することは、物事の順序や構造を把握する力を養います。 ・物語のBGM・効果音づくり：短い物語や絵本を読み、登場人物の気持ちや場面の雰囲気に合わせて、BGMや効果音を指導員とセッションして楽しみます。さらに「悲しい場面だから、ゆっくりした低い音を使おう」「ドアが開く音はギロで表現しよう」など、言語化へと発展させ、音や言葉で論理的に表現する力（創造的思考力）を育てます。 ・オリジナルメロディーの採譜：子どもが自発的に口ずさんだハミングや即興のメロディーを、指導員がその場でピアノで再現し、「あなたの歌、素敵なメロディーだね」と歌で伝えます。さらに、その音の流れを、見える形で記録（採譜）します。自分の創造物が認められ、保存されるという経験は、創作意欲を大きく育みます。
	言語コミュニケーション	<p>【音楽に乗せて「伝えたい」を引き出す】</p> <p>音楽は、言葉そのものだけでなく、非言語的なコミュニケーション能力も豊かに育みます。言葉や行動で本人の要求を引き出すような音あそびを取り入れて、一人ひとりの発達段階や特性に合わせたコミュニケーションの可能性を広げます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歌唱活動（発音・発語の促進）：好きな歌を歌うことで、楽しみながら口の動きや舌の使い方の練習になります。歌詞を通して新しい言葉や表現を覚え、語彙力を増やします。 ・コール&レスポンス（対話の基礎）：指導者が「こんにちは」と歌いかけ、子どもが楽器や歌で「こんにちは」と返すような活動です。相手の動きかけに反応するという、コミュニケーションの基本的なキャッチボールを学びます。 ・楽器を使った感情表現（非言語コミュニケーション）：言葉で気持ちを表現するのが苦手な子が、ドラムを力強く叩いて「怒り」を表現したり、鉄琴でキラキラした音を出して「嬉しい」気持ちを表現したりします。これは自己表現の重要な手段となります。 ・「音楽づくり」での要求・質問：「どれにしようかな？」と指導員が即興の歌で問いかけて子どもに楽器を選ばせます。子どもが手にとった楽器について指導員が「これはなんだ？」と問いかけ、子どもが「マラカス」と答えます。子どもが自分の意思を伝えたり、質問に答えたりする機会を音楽の中で創出し、対話の力を育てます。 ・音楽でおしゃべり（即興セッション）：指導員との信頼関係が築けたら、楽器を使って即興的な音の対話を試みます。子どもが叩いたリズムに応えたり、子どものメロディーに和音をつけたりすることで、言葉を越えた「音楽での会話」を楽しみます。相手の音を聴き、それに反応するという高度なコミュニケーション能力の素地を養います。 ・オリジナル歌詞づくり：絵本の挿絵を見ながらストーリーを歌にして楽しみます。指導員が「きらきら星」など、誰もが知っている簡単なメロディーにのせて歌ってきかせ、子どもの即興表現を引き出します。表現を認め合う経験を通じて、言語表現の多様性を感じ、コミュニケーションへの意欲を高めます。
	人間関係社会性	<p>【アンサンブルで「共にいる」喜びを学ぶ】</p> <p>指導者との「一対一の社会」の中で、また小集団の中で、人間関係の基礎を築きます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導者とのデュエット（協調性と他者意識）：指導者のピアノに合わせて、子どもが鈴を鳴らすなど、簡単なセッションから始めます。相手の音を「聴く」こと、自分の役割を理解し、タイミングを合わせる経験は、協調性の第一歩です。 ・即興アンサンブルと採譜：子どもの自発的な鼻歌やハミングに指導者が伴奏を付けたり一緒に歌ったりして、即興的なアンサンブルを楽しみます。自らの能動的な行動が他者に共鳴し、世界が広がる体験を通じて、コミュニケーションの楽しみを学び、自己肯定感を育みます。子どもの発した即興フレーズを指導員がその場で採譜して編曲し、次回以降のセッションや小集団のセッションで再現するなど、個人の表現力を可視化してみんなで共有する機会を設けます。 ・役割交代と順番待ち：一つの楽器を指導者と交代で演奏したり、「先生が3回叩いたら、次はあなたの番ね」といったルールを設けたりします。他者の存在を意識し、順番を待つといった社会的なスキルを学びます。 ・共同注意のトレーニング：同じ楽譜を見ながら演奏したり、指導員の合図を見て強弱をつけたりすることで、他者と同じ対象に注意を向ける「共同注意」の力を育てます。これは、集団活動に参加するための非常に重要なスキルです。 ・めざせマエストロ（指揮者体験）：簡単な楽曲を使い、指揮者の役割を体験するプログラムです。音の始まりと終わり、速さや強弱などを指揮で表現し、演奏者（他の子どもたちや指導員）に伝えます。自分の意図を非言語的な動きで伝え、演奏者がそれに合わせて音を出すことで、「自分の動きかけが他者に影響を与える」という成功体験を得ることができます。指揮者役の子どもは、演奏者の動きに注目し、リーダーシップを発揮する楽しさを学びます。演奏者側の子どもたちは、指揮者を見ることで共同注意の力をつけることができます。 ・自己肯定感を高める発表の場：セッションの最後に、その日の自分の活動やがんばりを保護者の方に具体的に伝える機会を設けます。小さな「できた！」「わかった！」の積み重ねと、それを言葉や表情で伝えて認められる経験が、人間関係の形成や自己肯定感の育成につながります。

<p>家族支援</p>	<p>家族が孤立することなく、安心して子どもの成長を見守り、育児の喜びを感じられるよう、以下の支援を通じて緊密なパートナーシップを築きます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定期的な個別面談と日々の情報共有：児童発達支援管理責任者を中心に定期的な面談の機会を設け、子どもの事業所での様子や成長について丁寧に共有し、家庭での悩みや希望を伺います。セッション後の対面フィードバックや連絡ツールの活用により、日々の活動内容やささいな変化、子どもの輝いた瞬間などを共有することで、家族が安心感を得られるように努めます。 ・保護者同士の交流の場の提供：親子で参加できる茶話会を計画し、同じ悩みや喜びを分かち合える仲間づくりの場を提供します。 <p>専門スタッフも同席し、気軽に相談できる雰囲気を作ります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音楽を介した親子プログラムの開催：親子コンサートを定期的に開催し、音楽の楽しさを親子で一緒に体験できる参加型のプログラムを通して、自然な触れ合いの場を提供します。 <p>家庭でも実践できる音楽あそびのヒントを提供し、親子間のポジティブなコミュニケーションを促します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ペアレント・トレーニングと学習会の実施：子どもの特性理解や、肯定的な関わり方を学ぶためのペアレント・トレーニングを計画的に実施します。また、外部講師を招いた学習会を開催し、専門的な情報や知識を得る機会を提供します。 ・活動参加や見学の機会の提供：保護者が支援の様子をいつでも見学できるように、事業所をオープンにします。季節ごとにお楽しみ会などのイベントを企画し、子どもの成長を共に喜び合う機会を設けます。 	<p>移行支援</p>	<p>子どもが次のステージ（進学先の学校、他の障害福祉サービス事業所など）へ自信を持って歩み出せるよう、一人ひとりの状況に合わせて切れ目のない支援を行います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・関係機関との積極的な連携：子どもの移行先となる学校や他の障害福祉サービス事業所と早期から情報交換を行い、連携体制を構築します。 ・移行先への訪問・同行支援：必要に応じて、職員が子どもと一緒に移行先の見学や体験に同行します。また、移行先の職員とのケース会議や情報交換会に積極的に参加し、円滑な引継ぎをサポートします。 ・本人へのアプローチ：絵カードや写真、ソーシャルストーリーを用いて、次の環境への見通しが持てるように働きかけます。身近なテーマで社会の仕組みを学べる活動を取り入れたり、自治体等が開催する体験イベントへの参加を促したりすることで、将来への期待感を育みます。
<p>地域支援・地域連携</p>	<p>事業所が地域社会の資源として機能し、障害の有無に関わらず、すべての子どもが尊重される地域づくりに貢献するため、以下の取組を行います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・関係機関とのネットワーク構築：地域の医療機関、相談支援事業所、行政機関、教育機関と常に連携し、子どもたちとその家族に必要な支援が届くようネットワークを構築します。 ・地域に向けた情報発信と啓発活動：ホームページや広報誌、SNS等を活用し、「あのにむ」の理念や音楽を通じた発達支援の取り組みについて積極的に情報発信を行います。また、発達が気になる子どもや家族を対象とした「音楽あそび体験会」や、支援者向けの研修会を開催し、地域への啓発活動を行います。 ・インクルーシブな地域交流の場の創出：利用者に限らず地域住民の方々も入場できるコンサートを定期的に開催し、子どもたちが生の音楽に触れる機会を設けると共に、障害理解を促進する交流の機会とします。 ・地域資源の活用と連携：地域のアーティストや大学、楽器店などと連携し、特別プログラムを実施するなど、地域の様々な社会資源を積極的に活用します。 <p>また、地域のイベント等にも参加し、子どもたちが社会とつながる経験を増やします。</p>	<p>職員の質の向上</p>	<p>職員の専門知識・技術の向上を目指し、以下のような取組を実施します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・セッションの録画・録音データおよび詳細レポートを用いた支援内容の自己省察と技術向上研修の実施 ・福祉概論、療育概論、幼児・児童心理学、音楽療法等の基礎研修 ・音楽療育の技術習得研修 ・先進施設・事業所等見学会 ・教材・プログラム研究会 ・スーパーバイザー（京都市児童発達支援センター等）による指導 ・講師招聘により、最新の理論や研究結果を学ぶ勉強会 ・職員（言語聴覚士、理学療法士、保幼小教諭経験者等）同士の交流研修 ・資格取得研修（強度行動障害支援者養成研修・中核的人材養成研修） ・専門書籍の事務所への設置や書籍貸与制度・購入制度の導入 ・職員同士の相互参観ワークショップ ・各職員による日々の療育の成果・課題の言語化および共有 <p>また、支援児童や支援内容の情報共有のために以下の取組を実施します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・支援前後のミーティング ・デジタルツールによる情報共有環境の構築 <p>加えて、「オール京都体制」の支援・連携ネットワークに入り、地域のニーズに全職員で応えられるチーム体制を構築します。</p>
<p>主な行事等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・季節のお楽しみ会：季節ごとに、子どもたちが日頃の活動を発表したり、保護者同士で交流したりする機会を設けます。 ・親子向けコンサート：プロの演奏家を招き、未就学児も含めて子どもたちが参加できるコンサートを事業所施設内で開催します。スタインウェイ製のグランドピアノなど質の高い楽器を設置し、子どもたちが本物の音を体験できる機会を提供します。利用者以外も入場可能とすることで、インクルーシブな場としても機能するよう工夫します。 		